

Title	「複合語のすすめ」：世界の言葉とつき合うための導入教育実践報告
Sub Title	"Einführung in den Plurilingualismus" : Praxis und Analyse eines Unterrichtsmaterials
Author	小林, 潔(Kobayashi, Kiyoshi)
Publisher	慶應義塾大学外国語教育研究センター
Publication year	2009
Jtitle	慶應義塾外国語教育研究 (Journal of foreign language education). Vol.6, (2009.) ,p.37- 44
JaLC DOI	
Abstract	Das "plurilinguale Kompetenz-Projekt (Plurilingual Competence Project)" ist ein innerhalb des Rahmenprojekts "Action Oriented Plurilingual Language Learning Project (AOP)" im Research Center for Foreign Language Education der Universität Keio durchgeführtes Projekt. Bei diesem Projekt handelt es sich um die Herstellung des Lehrmaterials "Fukugengo no Susume (Einführung in den Plurilingualismus)", das in universitären Fremdsprachenkursen für Anfänger benutzt werden soll, um den Studierenden plurilinguale und plurikulturelle Kompetenz zu vermitteln, sowie um die Effizienz dieses Lehrstoffes einzuschätzen. Die erste Ausgabe dieses Materials wurde im März 2008 veröffentlicht und im Sommersemester 2008 im Fremdsprachenunterricht an der Universität Keio und an der Universität Kanagawa eingesetzt. Die Effizienz dieses Lehrmaterials wurde mit Hilfe einer Umfrage unter den Studierenden untersucht und dementsprechend revidiert erschien im März 2009 die zweite Ausgabe. Aus diesem Projekt ergab sich, dass das Ziel des Materials, die Studierenden mit dem Plurilingualismus und -kulturalismus sowie dem metasprachlichen Bewusstsein vertraut zu machen, effektiv erreicht wurde. Dieses Ergebnis zeigt auch, dass dieser Lehrstoff an anderen japanischen Universitäten und ebenfalls auch an Oberschulen verwendet werden kann, um die Studierenden und Schüler in den Plurilingualismus einzuführen.
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12043414-20090000-0037

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「複言語のすすめ」

—— 世界の言葉とつき合うための導入教育 実践報告

小林 潔

„Einführung in den Plurilingualismus“ – Praxis und Analyse eines Unterrichtsmaterials

Das „Plurilinguale Kompetenz-Projekt (Plurilingual Competence Project)“ ist ein innerhalb des Rahmenprojekts „Action Oriented Plurilingual Language Learning Project (AOP)“ im Research Center for Foreign Language Education der Universität Keio durchgeführtes Projekt. Bei diesem Projekt handelt es sich um die Herstellung des Lehrmaterials „Fukugengo no Susume (Einführung in den Plurilingualismus)“, das in universitären Fremdsprachenkursen für Anfänger benutzt werden soll, um den Studierenden plurilinguale und plurikulturelle Kompetenz zu vermitteln, sowie um die Effizienz dieses Lehrstoffes einzuschätzen. Die erste Ausgabe dieses Materials wurde im März 2008 veröffentlicht und im Sommersemester 2008 im Fremdsprachenunterricht an der Universität Keio und an der Universität Kanagawa eingesetzt. Die Effizienz dieses Lehrmaterials wurde mit Hilfe einer Umfrage unter den Studierenden untersucht und dementsprechend revidiert erschien im März 2009 die zweite Ausgabe. Aus diesem Projekt ergab sich, dass das Ziel des Materials, die Studierenden mit dem Plurilingualismus und -kulturalismus sowie dem metasprachlichen Bewusstsein vertraut zu machen, effektiv erreicht wurde. Dieses Ergebnis zeigt auch, dass dieser Lehrstoff an anderen japanischen Universitäten und ebenfalls auch an Oberschulen verwendet werden kann, um die Studierenden und Schüler in den Plurilingualismus einzuführen.

1. 報告の対象と目的

文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業の助成をうけ慶應義塾大学外国語教育研究センターを学術フロンティア推進拠点とする「行動中心複言語学習プロジェクト (Action Oriented Plurilingual Language Learning Project: AOP)」が進められている (2006年度～2010年度)。その一環である「複言語のすすめ」プロジェクト (研究企画代表: 金田一真澄) は、初修外国

語導入授業時の使用を想定したパンフレット『複言語のすすめ』を作成し、実際の使用に基づいて教材としてのその効果を検証する企画である¹⁾。2008年3月に初版『《複言語のすすめ》+Xで世界をひらく一言葉は異文化への扉―』（慶應義塾外国語教育研究センター、2008年3月）が作成され、2008年度前期（春学期）に慶應義塾大学と神奈川大学において実験授業と効果検証のためのアンケート調査が行われた。翌年には、アンケート結果や内外の意見を取り入れた第2版（改訂版）『伝えたい、ぼくの心をきみの言葉で 複言語のすすめ』（慶應義塾外国語教育研究センター、2009年3月）が刊行された。初版の構想とその実践は森（2008）が報告しており、慶應義塾での授業アンケートの分析と本教材の効果の考察は高山ほか（2009）が行っている。

本稿では、先行する上記の論考を踏まえ、神奈川大学（ロシア語）での実験授業および『複言語のすすめ』の内容を利用した神奈川大学高校生講座（2008年6月）でのアンケート調査結果を報告する。もって、慶應義塾の学生を念頭に作られた本教材が他校でも一定の効果を持ちうることと、本教材が更なる可能性を持ちうることを示す。

2. 「複言語のすすめ」企画の経緯と慶應義塾での調査

「複言語のすすめ」の任務とするところは複言語習得の奨励と推進である。AOPの目的は、日本の言語状況と教育状況の変化を踏まえてCEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）が提唱する複言語・複文化主義の理念を参照しつつ大学での新しい言語教育を提案することだが、その一環として本企画は教材開発を通して、第二外国語学習の意義を自覚しつつ学習に取り組むよう学生に促すのである。その作成する『複言語のすすめ』は初版・第2版ともに、多様な言語文化への気づきの獲得とメタ言語感覚の涵養を主たる狙いとしており、日本の言語教育・学習に適した形になるように「1時間程度の授業で終わられるボリューム」で「様々な教員の使用に堪えるように極力薄いパンフレット形式」（以上、森（2008：51））をとっている。同時に、教材の理念と目的を関連資料とともに詳述した『教師用資料集』（作成者は金田一真澄ほか、慶應義塾外国語教育研究センター、初版2008年3月・第2版2009年3月、ともにA4判26頁）も編纂されている。

実験授業は初修外国語授業の第1回目に行い、学生への効果測定のためのアンケート調査は実験授業直前・直後、学期末の計3回実施した。前2者は同一のアンケートで、第3回目は質問を増やしたものである（いずれも作成者は高山緑）。

高山が作成したアンケートは、実験授業受講生の「態度（思考、意識、感情、行動）の変化」（高山ほか（2009：85））とその持続を調査するもので、4つの観点があり、それぞれに4つの質問で計16問である。各項目は双極の4件法（「とてもそう思う」「まあそう思う」「あまりそうは思わない」「全くそうは思わない」）で回答を求めている。これらの項目は実験授業全体で

共通で表1左列に示した(表内の数値は後述する神奈川大学の結果)。最終回の総合調査では、これらに加えて自由記述を含む16質問が追加されている(質問項目は、大学名が入った文言の他は両校で同一)。これらは以下の10の分析項目にまとめられる(詳細は、高山ほか(2009: 87-88)を参照のこと)。

- ① 第二外国語として履修した言語とその選択理由
- ② これまでの海外経験(海外旅行、短期のホームステイなど)の有無
- ③ 長期の海外での生活体験の有無、生活体験の時期と期間
- ④ 大学入学以前に第二外国語を学んだ経験の有無とその言語の種類、および学んだ時期と期間(年数)
- ⑤ 大学入学後、第二外国語を学んだ印象
- ⑥ 第二外国語を学んだことによる影響(英語に対する見方の変化、日本に対する見方の変化、複眼的思考(メタ言語意識)の獲得、世界を観る眼の変化、第3の外国語の学習動機の喚起)
- ⑦ 必修科目として第二外国語を学ぶ必要性の有無とその理由。必修化する場合の望ましい履修時期
- ⑧ 学生が考える外国語習得の秘訣
- ⑨ 目的を実現するための道具・手段として外国語を学ぶことの利点
- ⑩ 《複言語のすすめ》に関する評価

ただし、これらの項目で示されることは受講生のレディネス(①~④)と半期の外国語教育を経験した時点での「態度」(⑤~⑨)であり、必ずしも『複言語のすすめ』の効果によるとは言えない²⁾。本稿では教材評価(⑩)のみ取り上げる。

慶應義塾での実験授業は、日吉キャンパス各学部の1年生向け第二外国語クラスで実施された。担当教員9名、16クラス(朝鮮語2クラス、中国語3クラス、ドイツ語4クラス、フランス語2クラス、スペイン語2クラス、イタリア語3クラス)、アンケート実施の時期と対象学生数は、実験授業の直前(410名)・直後(378名)、半期講義最終回(384名)であった(授業の詳細は、高山ほか(2009: 83-84)を参照のこと)。

慶應義塾日吉での調査結果をまとめると次のようになる。すなわち、「外国語・外国の文化への興味関心」は「一時的に〔中略〕高まるものの長期には維持されにくい」。だが、「複数の言語を学ぶことの必要性・重要性の認識」は「実験授業後にこの意識が高まることが示された」し、「第二外国語あるいは外国語教育への先入観・構え」でも「実験授業の効果が認められた」。ただし、「外国語の学習は暗記ばかりでつまらない」という意識の改善には効果が認め

られなかったし、「外国語の学習意欲の程度」でも「実験授業の効果は認められなかった」。とはいえ、総じて言えば「『複言語のすすめ』を利用した実験授業によって『外国語・外国の文化への興味関心』や『複数の言語を学ぶことの必要性・重要性の認識』を高めたり、『第二外国語あるいは外国語教育への先入観・構え』を減じたりする効果が確認された」（以上、高山ほか（2009：124-125）による）。

最終調査での『複言語のすすめ』に関する評価（「『複言語のすすめ』を最初に使ったことで、第二外国語を学ぶ際に役立ったことはなんですか？」）では、慶應義塾の学生の回答は、「第二外国語に興味を持って学べた」（22.5%）、「言葉そのものに対する関心が広がった」（19.5%）、「第二外国語が英語と比較しながら学べた」（18.0%）という順で、「特に変わらなかった」とした者は38%であった（以上、高山ほか（2009：110））。

表 1

		神奈川大学ロシア語				神奈川大学高校生講座			
		4	3	2	1	4	3	2	1
1：「外国語・外国の文化への興味関心」									
「外国語を話すことが好きだ」	事前調査	33.3	33.3	33.3	0.0	10.3	53.8	28.2	7.7
	事後調査	38.1	28.6	33.3	0.0	17.9	35.9	43.6	2.6
	総合調査	38.1	66.7	19.0	14.3				
「自分が生まれた国以外の国や地域の文化・歴史に興味がある」	事前調査	57.1	28.6	14.3	0.0	30.8	43.6	20.5	5.1
	事後調査	57.1	42.9	0.0	0.0	38.5	43.6	15.4	2.6
	総合調査	61.9	52.4	23.8	0.0				
「いろんな国や地域に行ってみよう」	事前調査	57.1	42.9	0.0	0.0	64.1	33.3	0.0	2.6
	事後調査	66.7	33.3	0.0	0.0	66.7	28.2	5.1	0.0
	総合調査	76.2	47.6	4.8	9.5				
「外国人と友達になりたい」	事前調査	47.6	47.6	4.8	0.0	46.2	46.2	7.7	0.0
	事後調査	52.4	38.1	9.5	0.0	46.2	35.9	17.9	0.0
	総合調査	42.9	66.7	23.8	4.8				
2：「複数の言語を学ぶことの必要性・重要性の認識」									
「これからの社会では、3つ以上の言語を使えることが求められている」	事前調査	14.3	47.6	38.1	0.0	10.3	38.5	48.7	2.6
	事後調査	23.8	42.9	28.6	4.8	25.6	46.2	23.1	5.1
	総合調査	14.3	42.9	71.4	9.5				
「複数の言語を学ぶことによって、新しい言語を学びやすくなる」	事前調査	19.0	38.1	42.9	0.0	20.5	56.4	23.1	0.0
	事後調査	28.6	47.6	19.0	0.0	33.3	51.3	12.8	2.6
	総合調査	33.3	71.4	28.6	0.0				
「第二外国語を学ぶことで、英語を新しい視点で捉えなおすことができる」	事前調査	28.6	42.9	28.6	0.0	15.4	69.2	12.8	2.6
	事後調査	33.3	61.9	4.8	0.0	25.6	64.1	10.3	0.0
	総合調査	61.9	42.9	28.6	4.8				
「外国語を学ぶことで、自分が生まれた国やそこで話されている言語を新しい視点で捉えなおすことができる」	事前調査	42.9	47.6	9.5	0.0	17.9	64.1	15.4	2.6
	事後調査	33.3	61.9	4.8	0.0	28.2	64.1	7.7	0.0
	総合調査	38.1	81.0	9.5	9.5				

		神奈川大学ロシア語				神奈川大学高校生講座			
		4	3	2	1	4	3	2	1
3：「外国語の学習意欲の程度」									
「新しい言語を覚えることは楽しい」	事前調査	66.7	28.6	4.8	0.0	41.0	43.6	15.4	0.0
	事後調査	57.1	42.9	0.0	0.0	41.0	43.6	15.4	0.0
	総合調査	57.1	61.9	19.0	0.0				
「外国語を流暢に話せるようになりたい」	事前調査	76.2	23.8	0.0	0.0	71.8	25.6	2.6	0.0
	事後調査	57.1	28.6	0.0	0.0	66.7	23.1	10.3	0.0
	総合調査	85.7	42.9	0.0	9.5				
「将来、外国語を使って仕事をしたい」	事前調査	42.9	38.1	19.0	0.0	28.2	25.6	35.9	10.3
	事後調査	42.9	38.1	14.3	0.0	28.2	30.8	33.3	7.7
	総合調査	47.6	38.1	42.9	9.5				
「新しい言語を学ぶことによって、自分の幅や可能性が広がる」	事前調査	52.4	47.6	0.0	0.0	41.0	51.3	7.7	0.0
	事後調査	61.9	38.1	0.0	0.0	59.0	33.3	7.7	0.0
	総合調査	76.2	47.6	9.5	4.8				
4：「第二外国語・外国語教育に対して抱く先入観や構え」									
「外国語の学習は暗記ばかりでつまらない」	事前調査	0.0	38.1	33.3	28.6	7.7	46.2	38.5	7.7
	事後調査	0.0	28.6	52.4	19.0	2.6	38.5	48.7	10.3
	総合調査	0.0	57.1	47.6	33.3				
「外国語を学ぶことは時間がかかって大変だ」	事前調査	28.6	52.4	19.0	0.0	28.2	56.4	10.3	5.1
	事後調査	23.8	57.1	14.3	4.8	12.8	69.2	12.8	5.1
	総合調査	52.4	76.2	4.8	4.8				
「正しい文法を使わないと相手に伝わらない」	事前調査	0.0	47.6	42.9	9.5	12.8	33.3	48.7	5.1
	事後調査	4.8	42.9	38.1	14.3	17.9	35.9	38.5	7.7
	総合調査	9.5	38.1	81.0	9.5				
「授業で学ぶことがコミュニケーション能力と結びつかない」	事前調査	9.5	23.8	52.4	14.3	7.7	38.5	46.2	7.7
	事後調査	4.8	23.8	57.1	14.3	7.7	33.3	51.3	7.7
	総合調査	4.8	33.3	95.2	4.8				

3. 神奈川大学での実験授業とアンケート結果

神奈川大学では1名の教員によりロシア語クラスで実験授業が行われた。受講生は、実験授業直前・直後調査時が21名、最終調査時で29名である。神奈川大学では授業初回ではまだ履修言語が決まっておらず、また受講生の学部・学年・履修体験（第何言語目か）もまちまちで、実験授業を受けた全員が最終調査アンケートに答えたわけでもない。実験授業を受けずに最終調査アンケートに答えただけの学生もいて、それゆえ集計人数に違いが出ている。また、同2008年6月にオープンキャンパスに来校した高校生に上述の教員が『複言語のすすめ』に基づいた90分の授業を行い、同様のアンケート調査を実施した。神奈川大学案内という性格も有する講座なので慶應義塾の出版物である本教材を配布するわけにはいかず、教材の内容をパワー

ポイントのスライドに組み替えて行った（受講生39名。ただしアンケートは授業直前・直後の2回のみ）。

2種の実験授業につき、事前調査、事後調査、総合調査での16項目への回答の推移を表1に示す（4「とてもそう思う」、3「まあそう思う」、2「あまりそうは思わない」、1「全くそうは思わない」、数値は%）。

1：「外国語・外国の文化への興味関心」に関してはそれほどの効果が見られない。

2：「複数の言語を学ぶことの必要性・重要性の認識」では、複数の外国語の学習について効果が見られる。「これからの社会では、3つ以上の言語を使えることが求められている」で「とてもそう思う」が一時的にであれ大学生・高校生とも授業によって増加した（それぞれ14.3%から23.8%そして第3回14.3%；10.3%から25.6%）。ただし、「外国語を学ぶことで、自分が生まれた国やそこで話されている言語を新しい視点で捉えなおすことができる」では大学生・高校生で違いが見られる。高校生では「とてもそう思う」が増加し（17.9%から28.2%）、「あまりそうは思わない」／「全くそうは思わない」が減少しているが（それぞれ15.4%から7.7%；2.6%から0%）、大学生の方では「とてもそう思う」が減少している（42.9%から33.3%、第3回38.1%）。とはいえ「あまりそうは思わない」（9.5%から4.8%しかし第3回9.5%）が「まあそう思う」に変わっている（47.6%から61.9%、第3回81.0%）。したがって授業の意味はあったと言える。

3：「外国語の学習意欲の程度」については、「新しい言語を覚えるのは楽しい」で「とてもそう思う」と回答した者の割合が特に大学生で減少しているが（66.7%から57.1%、第3回57.1%）、一方で「外国語を流暢に話せるようになりたい」で「とてもそう思う」と回答した大学生の割合は一旦減少したものの第3回目最終調査で増加している（76.2%から57.1%しかし第3回85.7%）。「新しい言語を学ぶことによって、自分の幅や可能性が広がる」を「とてもそう思う」とする者は大学生でも高校生でも増えている（それぞれ52.4%から61.9%、第3回76.2%；41.0%から59.0%）。

4：「第二外国語・外国語教育に対して抱く先入観や構え」では「外国語の学習は暗記ばかりでつまらない」「外国語を学ぶことは時間がかかって大変だ」の2項目で「とてもそう思う」／「まあそう思う」から「まあそう思う」／「あまりそうは思わない」に減じた（例えば、後者の「時間がかかって大変だ」について「とてもそう思う」高校生は28.2%から12.8%になっている）。ただし同項目の大学生の調査最終結果は52.4%と多い。「授業で学ぶことがコミュニケーション能力と結びつかない」は「あまりそうは思わない」が大学生・高校生双方で増加している（それぞれ52.4%から57.1%、第3回95.2%；46.2%から51.3%）。教育機関での外国語学習への期待を形成し得たと言える。一方で「正しい文法を使わないと相手に伝わらない」で「とてもそう思う」の割合が大学生・高校生ともに、しかも後になるほど増えている（それぞ

れ0%から4.8%、第3回9.5%；12.8%から17.9%)。これは、学生の先入観の有無というよりも、教材にある言語学的トピックへの反応および実際の授業での体験によると考えられる。

こうして見ると、本教材と実験授業は、神奈川大学ロシア語クラスにおいても高校生講座においても一定の効果をあげていることが分かる。「複数の言語を学ぶことの必要性・重要性の認識」を高めたし、学習意欲に関しても、外国語学習は苦勞が多いが自分の幅や可能性を広げうるのだ、と認識させることができた。また、「第二外国語あるいは外国語教育への先入観・構え」を減じ教育への期待を増加させる効果が確認された。外国語学習は暗記ばかりではないと思わせた効果は慶應義塾では見られなかったが、神奈川大学では見られ、受講生によっては教材がその効果を発揮することが読み取れる。学習意欲の継続や言語学習の文法偏重からの解放については、神奈川大学でも教材の効果がうまく見られないところで、本企画の今後の課題になると思われる。

最終調査での『複言語のすすめ』に関する評価は、神奈川大学では慶應義塾における以上の肯定的評価である。「第二外国語に興味を持って学べた」(10名34.5%)「言葉そのものに対する関心が広がった」(10名34.5%)という回答が同じように高い。「特に何も変わらなかった」(4名13.8%)の数値は慶應義塾38%に比べて低い。第三外国語への喚起「他の外国語も学びたいと思った」は慶應義塾では11%を越す程度(高山ほか(2009:110))なのに対し、神奈川大学では10名34.5%となっている。

4. 『複言語のすすめ』の更なる可能性

慶應義塾で作成された教材『複言語のすすめ』は対象として想定された慶應義塾の学生以外にも有効であった。また、その内容は、印刷されたパンフレットからスライドへと形式を変え対象を大学生から高校生に変えても訴求力があることが分かった。この結果が意味するところは以下の3点である。

- 『複言語のすすめ』は、複数の異なる大学の授業でも効果を上げうる。
- 『複言語のすすめ』は、高校生にたいしても効果がある。
- 『複言語のすすめ』は、パンフレットという印刷された形だけでなく、それに基づいて別形態で作成したものでも効果を上げうる。

すなわち、本教材は普遍的な内容を持つ。これは本企画の対象を大学教育に限定する必要がないことを示唆する。そして、高校までに複言語意識の涵養がある程度できれば、本教材は現在のバージョンでは大学教育で使う必要はなくなる。複言語意識やメタ言語感覚の涵養は生涯にわたって続くものであるから、その時には新たな大学用『複言語のすすめ』が必要

となる。もちろん、大学での複言語教育は具体的な外国語の学習と結びついているところに強みがあり、初修外国語授業とリンクさせてきた本企画のこれまでの営みは活かされることになる。

望むらくは、かかる教材は、初年次用にもまた大学教育の折々でも使用できるような、そして紙媒体・電子媒体等の複数のメディアで提供されるものであって欲しい。これは技術的にも十分実現可能なことで、実際にメディアを変えても効果があることは上に示した通りである。デジタルネイティブと呼ばれ生まれた時から電子技術に親しんできた学生には電子媒体の方がより訴求力を持つ可能性がある。

加えて、教材は、慶應義塾以外の教育機関でも抵抗なく利用できるオープンリソースとしての提供であって欲しい（神奈川大学高校生講座で電子媒体を採用したのは、慶應義塾の名前が入った印刷物は配布できないからでもあった）。オープンリソースとして開発し、実際の授業にあたっては、そのリソースから対象となる受講生と教育現場を勘案してパンフレットなり電子教材なりを編纂するのである。慶應義塾の学生には慶應義塾に特化した教材を編めば良い。本企画の成果がオープンリソースとして慶應義塾以外の高校なり大学なりで利用されるのは本企画の貢献となるだろうし、一方で、たとえ他所で教材を丸ごと利用されたとしても慶應義塾という場ではそれ以上の教育ができるはずである。

註

- 1) 本企画の背景とプランは金田一（2008）により示されている。なお、「複言語のすすめ」を企画名、『複言語のすすめ』を教材名とする。アンケート設問の引用部分を除く。
- 2) 高山ほか（2009）はこれらの項目の調査結果もとりあげ、共分散構造分析も利用して言語教育のあり方そのものに関わる考察を行っている。

参考文献

- 金田一真澄（2008）：「複言語・複文化主義と慶應義塾の外国語一貫教育」『日本私学教育研究所調査資料 244 キャリアデザインにつながる多言語教育』、pp.7-12.
- 高山緑、金田一真澄、森泉（2009）：「世界の言葉とつき合うための導入教育（2）——《複言語のすすめ》による導入教育の実践と分析」『慶應義塾大学日吉紀要ドイツ語学・文学』第45号、pp.81-132.
- 森泉（2008）：「世界の言葉とつき合うための導入教育——第二外国語導入教材《複言語のすすめ》の構想と実践」『慶應義塾大学日吉紀要ドイツ語学・文学』第44号、pp.47-78.